

徳川家康が茶の湯に使ったとされる湧き水口「お茶の水」(東京都三鷹市)



今昔まち話

井の頭池

将軍家の名水復活へ試み



井の頭池 日本最古の上水道、神田上水(現在の神田川)の水源として近代水道が整備される1900年ごろまで人々の生活を支えた。一帯の御料(ごりょう)地は17年5月、日本初の郊外型公園となった。いくつも湧き水口があった池は「七井(なない)の池」とも呼ばれ、流量は1日1万トンを誇った。現在は「お茶の水」を含め地下水をポンプでくみ上げて1日約3500ト。根本的な水質改善には湧き水の復活がカギだ。

「お茶の水」と聞くと、JR御茶ノ水駅界限(かいわい)を思い浮かべる人が多いだろう。実は同じく徳川将軍家が茶の湯に使った伝説のある「お茶の水」が東京都武蔵野市と三鷹市にまたがる井の頭恩賜公園にある。

家康が「関東随一の名水」とほめ、3代将軍・家光が「このうえなくうまい水を出す井戸」として湧き出る水をたたえる池を「井の頭」と名付けたとされる。ところが井の頭池は1950年代に武蔵野地域の人口が増え、周辺の地下水が大量にくみ上げられた影響もあり、63年にいったん枯渇。その後

も湧き水は十分でなく、池は濁った姿をさらしていた。転機は2004年秋に相次いだ台風だった。大雨で地下水位が上昇して湧き水が戻り、1カ月間ほど池の3分の1で底が見える状態になった。「池はまだ生きている。地域住民が動き、地元市や池を管理する東京都と連携してプロジェクトが立ち上がった。

最大の事業は「かいぼり」だ。農業用のため池で農閑期に水を抜いて水質を改善する方法で、井の頭池では初めての試みだった。14・16年に2回実施したところ、80年代以降に持ち込まれた外来魚をほぼ駆除でき、在来の魚などが増え、都西部公園緑地事務所の内山香さん(49)は「じわじわと生態系が回復し、水質も改善しつつある」という。固有種で幻の水草だった「イノカシラフラスコモ」も約60年ぶりに池底の土壌から復活した。

今冬、3回目のかいぼりに挑む。住民と行政をつなぐNPO法人「生態工房」(武蔵野市)の事務局長、佐藤方博さん(44)は「周辺を含めた水環境の改善は行政任せではなく、住民の理解と協力が必要」とみる。公園は5月に開園100周年を迎えた。「井の頭」をよみがえらせ、未来につなぐ取り組みが続く。